「ラーゲリより愛を込めて」　2023年03月27日

久しぶりに映画館に行って、評判の「ラーゲリより愛を込めて」を観た。「ラーゲリ」はロシア語の「収容所」のことで、実話をもとにした、シベリアに抑留された人々の苦悩と愛を描いた映画である。抑留された人たちは戦争中の捕虜ではなく、敗戦後、強引にソ連に連れて行かれた人々である。ソ連は独ソ戦争で2千万人の兵士が死亡した。労働力を補うために、日本人を、言わば、拉致して連れて行って、強制労働をさせたのである。明らかに、国際法違反である。同じように、連行されていたドイツ人は強制労働を拒否したという。日本人は人が良く、また、国際法に関して無知であった訳である。抑留された日本人は60万人くらいで、彼らが経験したことは、残酷そのものであった。少ない食料、寒冷な風土、過酷な労働の中で、「ダモイ＝帰国・帰還」という言葉に希望を託し、生きようともがいた。仲間は次々と倒れていき、1割近い人が、飢えと寒さと病で命を落とした。次は自分の番だと思いながら、シベリアの大地に死者たちを埋葬した。

私は、シベリア抑留から帰還した6人の人と出会う機会を得た。50数万人が帰国でき、その内、6人と出会ったというのは、かなり、確率が高いのではないか。また、シベリア抑留の本も何冊か読んだ。その中で、立花隆氏の『シベリア鎮魂歌―香月康男の世界』が印象深い。香月は帰国後、画家として、シベリアの絵を描き、人々の心を捕えた人である。

映画「ラーゲリより愛を込めて」は山本幡男という人が主人公である。妻と4人の子どもがいたが、家族とは、日本で再会しようと約束して満州で別れる。彼は貨車でシベリアに連れて行かれ、材木を切り出す強制労働をさせられる。黒パン一切れと中身のないスープの食事で、体力は日に日に消耗していく。生死の境目を生きているので、皆、自分だけが生き延びようと懸命である。戦争時代を引きずる上官は、仲間をいじめ抜く。少しでも得をしようと騙し、裏切りは日常的に起こる。その中で、山本はヒューマンな生き方を貫く。ある時、東に向かう列車に乗せられ、ダモイの時が来たと喜ぶが、別のラーゲリに移される。そこで、スパイ容疑で25年の強制労働の判決を受ける。それは、元上官だった人の虚偽の密告であったことを知る。そこでも、苦悩と裏切りは絶えない。絶望の中、脱走を企て、射殺される者もいる。ソ連共産党の教育を受け、共産党に入党すれば良い待遇を受けるので、入党し、暴力的に宣伝に邁進する者もいる。主人公の山本は、ここでも、家族との再会を希望にして、人間性を失わず、仲間への愛を貫く。やがて、彼は病に倒れる。仲間の一人が、彼を病院に連れ行けと、労働拒否の座り込みをする。皆は、彼の山本への愛に賛同し、座り込みを決行する。ソ連側は要求を受け入れ、山本を診察したところ、喉に癌があることが判明する。病は重く、回復の見込みがないことが分かった時、仲間は遺書を書かせる。山本は最後まで人間の尊厳を守り抜いたが、家族に会えずに、命を落とす。ソ連から日本に帰国する場合、文字を記したものは一切持たせないので、遺書を4人が暗記して、日本に帰ることにする。仲間は毎日、彼の遺書を繰り返し読んで、暗記する。

12年間の抑留後、帰国できた4人はそれぞれ、山本の家族を訪ね、暗記した遺書を読み上げる。ラーゲリより愛を込めた言葉が妻、家族のもとへ届く。山本は子どもたちへ「最後に勝つものは道義であり、誠であり、まごころである」と言い遺している。映画は、生きること、死ぬこと、そして、愛することとはどんなことであるかを訴えている。生は死を直視する中で、リアリティを持って受け止められる。そして、愛が希望を生み出す。私は、この種の本や映画に触れる度に、このような悲劇を生み出したのはどういう社会で、どこに責任があるのかを問うことが大事だと思っている。